

9-4

主題 利用者の服薬管理の工夫

リスク管理

副題 誤薬ゼロをめざして

誤薬防止

研究期間

12ヶ月

事業所

養護老人ホーム：大森老人ホーム

発表者：林下 富美子 はやししたふみこ

アドバイザー：

共同研究者：宮内 真澄美 みやうちますみ

電話

03-3762-8851

メール

oomori_sien2kai@dolphin.ocn.ne.jp

FAX

03-3762-8920

URL

http://www6.ocn.ne.jp/~sousei4/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

平成9年に開設した大田区にある定員130名の養護老人ホームでデイサービスセンターが併設されており、都営住宅や体育館、児童館などがある複合施設の1階から4階までが施設となっている。

養護老人ホームは利用者の自立した生活や社会復帰を促進するための支援を求められている施設ではあるが、日常生活能力の低下が顕著な利用者が多くなりつつある。

＜研究前の状況と課題＞

利用者は、自力で通院可能な方も多いものの、処方薬を確実に服用できる方は少ないため、施設の日々の配薬が大きな業務となっている。

問題の状況

- ①配薬の準備に時間がかかる上分かりづらい。
 - ②薬の保管方法が統一されていない。
 - ③個別の薬情報が整理されていない。
- 等の問題が生じていた。

その理由として

- ①作業はすべて手書き、ゴム印で行い、薬も一包装されておらず1つずつホチキスで台紙に止めている。手書きのため書体、書式がばらばらである。
 - ②個人別保管箱への分け方、薬箱の大きさや形、保管場所が統一されていない。
 - ④日々の作業に追われ、カルテや物品の整理が不十分である。
- 等が考えられる。

このままでは、誤薬による大きな事故にも繋がりがかねないと、状況改善のための検討はしていたが、看護師を核とした一定の職員の範囲に止まり、部分的改良に止まっていた。

＜研究の目標と期待する成果＞

- 利用者の身体的能力、理解力の低下も年々目立つようになってきたため、自己管理できない利用者が増えてくることが懸念される。その中で、全職員が不安を抱くことなく安心して配薬でき、さらに誤薬「0」を目指すことを目標にした。
- この取り組みを行う事で、異職種間での意見交換が盛んになり以前にもまして関係性がスムーズになる事や看護師以外の職種も利用者の薬や病気のことを知る事ができ、担当利用者への理解を深めることも期待された。
- また、それまで預かって配薬していた利用者でも、配薬カレンダー等を利用し職員側が工夫することで、自身でできるようになるのではないかと考えられた。

＜具体的な取り組みの内容＞

①配薬箱の見直し

- ・大きさの統一と色分け。

②個人別保管箱の整理

- ・名前などはすべてPC処理で字体を統一する。
- ・配薬箱との色の統一性を図る。

③薬包紙とセッティングまでの工夫

- ・囑託医の処方薬は一包化を依頼する。
- ・隔日投与や日にち指定薬には、目印をつける。

④職員の対応

- ・ダブルチェックの徹底。
- ・呼名し渡し、共に確認する。
- ・薬の変更等は連絡簿、朝、夕の申し送りで伝えることを徹底する。
- ・カルテには最新の薬情書をファイルする。

⑤利用者への対応

- ・囑託医以外に受診している方には、一包化と受診後に薬情書を医務室へ必ず持参することを依頼する。

- ・配薬カレンダー等の工夫をして、できるだけ自身で服薬できるようにする。

⑥確実に服薬するために

- ・薬包から薬を出すことが難しい利用者、薬包で渡すと服薬せず持ち帰ってしまう利用者→あらかじめカップに開けてきちんと服薬できるようにする。
- ・拒薬傾向のある利用者→食事が終わった時点で薬を渡し服薬を確認する。

＜取り組みの結果と評価＞

●薬に関してそれまでは看護師にまかせっきりにしていたが、皆で検討し工夫していくにつれ、支援員の間でも薬や病気に関する関心が高まった。それにより利用者への対応もできるようになった。

●職員の意識が変わったことで、利用者も自分の薬に関心を持ったり、自己管理したいとの気持ちを持つなどの変化が見られた。

●整理され分かりやすくなったので、看護師不在の際も自信を持って薬の準備ができるようになった。常に支援員が薬にかかわることで、新しいアイデアも出てきやすくなり、さらなる工夫に繋がっていった。

●それまで看護師が薬に費やしていた時間を、本来の利用者への対応の時間として多く持つことができるようになった。

＜まとめ＞

取り組みを始めた当初（H18年）に比べ誤薬に関するヒヤリハット数は徐々にではあるが減少してきている。

まだゼロにはなっていないのが現状だが、せっかく積み重ねてきた、協力しアイデアを出し合い検討し工夫するというこの体制を大事にしながら、今後も皆で、ゼロを目指して努力していきたいと思う。

《提案と発信》

どの施設においても抱えているであろう「誤薬防止」という課題に関して、職種を超えて評価し、業務を整理工夫し、効率化をめざし状況改善に取り組んできた。この事案改善について、異職種間での連携が図れ、一定の効果が見えたことは、他の業務の見直しや効率に施設全体で進めて行こうとする職場風土を築く上でも大きな成果となった。

【メモ欄】追加資料 有 ☐ 無 ☒